

「産業前進基地としての西海岸時代」

—特に群山港開発を中心に—

趙 履 晟

CHO YI SONG

(全州大学)

目 次

1. 序 論
2. 港湾開発と都市問題
3. 港湾開発管理問題
4. 全北地域開発の課題
5. 西海岸時代の到来
6. 群山港と西海岸
7. 結 論

1. 序 論

環太平洋時代を迎えた我が韓国は、88年の Olympic を 成功裡に終えて、その後、我等の位相は国際的に大きく頭角を表し始めて、世界に雄飛する事が出来る好機を持つ様になった。今やこの様な偉勢を追って、統一への道を探る事に心血を傾注すべき時なるを再認識せねばならないが、これに先立つて、われわれは、まず国論を総結集せねばならないであろうし、また国内の均衡発展と北方政策の積極的推進の為に、産業前進基地としての西海岸開発は、時急な課題として登場するに到り、わが全北地方の心ある有志達は、

この様な日が来る事を既に10余年前から強調し、又、訴えて来たのである。しかし、為政者達は、今やその必要性を痛感し始めた様であるが、万時之嘆はあるけれど、非常に多幸なことであると同時に、国家将来の為にも祝福すべきである。

この様な観点から、筆者は、この機会に本問題を中心とする既発表の文献を参考にしながら、私見を陳開して見ようとするものである。西海岸開発といえば、先づ港湾問題が一次的に抬頭せねばならないと見るために、これに関する論議から始めねばならないであろう。

2. 港湾開発と都市問題

①我国は、今や国内外の難かしい与件の中でも海運港湾の当面課題が、その開発と共に海運経営の回生基盤を造成し、海運産業の母体となる港湾の持つ経済性確保に努力すべきである。

②港湾といえば、Harbour 又は Port と呼ばれているが、我国では従来、港口又は浦口とも呼ばれるが、単に港湾の開発に限らず、これを都市の再開発問題と関連させて研究する必要があるであろう。

③即ち、港湾と隣接都市の機能的変質又は混在等による関連施設の総合的整備の必要が生ずる事もあるであろう。

3. 港湾開発管理問題（群山港の場合）

①群山港の場合、現在、外航第1埠頭も第2埠頭も共に大型外航船の進入航路が水深条件とか其他の施設や Service という面で多く改善を急がねばならない時点にある。

②錦江河口提防建設による航路や河床の変化の為、外航路の不定期的入航に対備する港湾管制機関の拡充（管制室等も含む）が要望される。

③外港埠頭の夜間照明施設の補修工事がおくれて、荷役作業に支障を招いている点も管理不在として指摘されねばならない。

4. 全北地域開発の課題

①地域経済の落後性に伴う地方民の疎外感による地域感情という観点からも、現在の相対的低成長状態は早急に解決されねばならない（所得水準全国平均値から見て偏差71%）。

②この問題解決のため、高度産業体を誘致開発し、高付加価値生産的産業団地を助成すべく、群山臨海工団や裡里工団、全州工団、井邑団地等の規模を拡大すべきである。

③東西高速道路と西海岸高速道路が一日も早く建設されて物動量を可及的平均化する必要があるだろう。

④農外所得の向上と全国平均水準所得への接近のため、その可能な産業の選別という観点から、先づ軽工業に焦点を合わせ、次に総合製鉄とか精密機械工業並びに成長業種中心の中小企業等も検討されるべきである。

⑤地域工業化を支援する措置、即ち、都市人口政策と工業再配置法並びに大都市整備法等が実効ある様実践されるべきである。

5. 西海岸時代の到来

①地方政策特に中国貿易の活潑化に伴う西海岸時代に備えて、政府の具体的開発計画発表を契機に、性急な不動産投機等が盛行し始めた現象に効率的に対処すべきである。

②今、政府の部門別開発計画を一瞥すると、a) 産業基盤施設の構築、b) 港湾施設の拡充、c) 輸送体系の確保、d) 背後支援都市及工団の育成、e) 観光機能の拡充等がある。

6. 群山港と西海岸開発

①亜細亜大陸と太平洋を連ぐ海岸の上陸点であり、韓半島の腰としての特に中国大陸を眼の前に控えた大陸交易の門戸、茲がまさに国土西海岸の資源

の宝庫たる群山市であり、群山港である。

②この群山を中心に、国家的次元の新しい大規模開発事業が推進されているのである。

③即ち、経済規模の拡大と港湾物動量の増大に対処すべく、釜山港と仁川港の年間荷役能力の二倍を越す4,200万 tonの計画を樹立しているのである。

④群山—沃溝—長項沿海の埋立作業による、一大広域産業基地を設立する事は、その規模に於て想像を超越するに余りあり、国際的港口都市として韓国を代表する都市に成長するであろうし、西海岸の拠点都市、中部圏の関門都市、全北開発の先導都市としての役割を担当する事になるであろう。

⑤茲で一つの新しい難題に逢着するのであるが、それは西海岸一帯の大規模干拓工事と生産工場の乱立の為に、海岸が汚染して水産物生産量が激減しつつある現象に鑑みて、之等漁民達の被害補償策を考究せねばならないであろう。

⑥群山港の開発を論ずる時、その方向設定を如何にすべきかは、港湾開発の究極的目標が港湾の保有すべき諸機能の拡大と、その拡大された機能を統合、調整する運営の効率化にあると見る時、その方向設定を次の幾つかに分けて考える事が出来るであろう。

a) 物動量の増大問題, b) 荷役能力提高の問題, c) 施設の利用率増大と新規規模施設の増置問題, d) 港湾労働力の維持開発問題等。

7. 結 論

産業前進基地としての西海岸時代は、明らかに到来している。今まで数次に亘る言及の如く、北方政策中特に対中国交易の増大も明確な事実である。しかし、茲でわれわれは暫く溢れる希望と意欲をおさえつつ、再考すべき時点でもある事を又、銘心しなければならないであろう。凡ては相手があるものである以上、その相手の実相を把握せずには、判断を誤まり、所期の目的の達成が困難になってしまう事が起るであろう故に、我々は先づ西海岸時代を迎えながら、国内地域間の均衡発展と共に、中国其外の国々の真相を出来る

だけ明確に把握する事が緊要であろう。

もともと、俗称曰く、「湖南冷待」という言葉は、どこから由来したものであるかを検討して見る時、種々の原因があろうけれども、その重要なものの一つが、地域間の不均衡発展実態である事は確かであるし、従って、所得の格差から来る疎外感ゆえである以上、この問題を解決する方法の一つとしても、西海岸開発は国家的側面からも必然的な要請であろう。

今、視角を変えて、中国とかソビエツトの実情なり立場を少し考察して見る事にしよう。一国の交易状態は、色々の要因によって決定されるものであるけれども、内的には産業構造とか自然資源の保有状態、労働とか資本の供給状態及び経済規模等の経済的要因のみならず、対外貿易の歴史とか国民の気質及び文化的背景等、経済外的要因によっても左右されるし、外的には地政学的位置、外交関係、周辺国家との経済的補完関係とか、国際景気等、多くの要因が作用するのである。中国の場合もこれ等の要因によって左右される事になるのであるが、特にこの国は、政治的思想的背景が対外貿易を大きく支配するものと見ざるを得ないし、昨今にはそんな政治的体制とは別途に、それこそ純粋な経済的必要によって外交とか交易が多角的に検討されている事を確認することが出来るし、明らかに彼等はソビエツトと共に、我韓国を必要としているし、我々も又、同じ立場である以上、間接又は直接貿易までが、徐々に頻繁化されるであろう。こうなった場合、我々とは既に中国又は其外の国々に進出している先進国商社の既存販売網を早く活用する方法を考え、又、これ等国々と取引を始めている第三国との合作形態で進出を図り、重化学工業建設の技術要員用役と輸送を促進し、現地原資材を利用する方法とか、香港等輸出基地に現地法人を設立して、交易を模索する事等も一つの方法になるであろう。

その様にして、民間相互間の直間接交易と政府間の貿易協定が締結されたからには、取引は益々頻繁になると共に、政治関係も漸次発展する様になるであろう。この様な事実は中国とかソビエツトを始め、ハンガリ其外東欧圏諸国との関係に於て、ほぼ同じ共通点を持っているものと見てよいであろう。即ち、彼等は皆我国の資本とか技術、労働力等を活用する事が、一番有利で

あるという点を知って手をのばしているからには、早く、しかし、慎重に、提携する方法を考究すべきである。

北韓の実情も我々が既に知っている通り、体制だけを固執している時点ではないし、経済事情とか其外周辺のあらゆる情勢がどうにも仕方のない状態である現状なるを自認している以上、我国との提携が忌避出来ない実情に置かれている為に、最近はこちらの経済人を招請までしながら、自分達の開発に関する合営関係とか貿易交流に関する協議を行っており、又、こちらでも国内百貨店で北韓の商品展示会開催の風のようなものも起こしているのである。

又、見よ、目下東欧圏一帯が我々との合作社設立とか、民間乃至政府次元の貿易事務所、貿易代表部、又は通商代表部等の相互開設に関する協議とか文化協定までも推進しているし、特に中国との関係に於ては、相互が一層積極的に、且つ、緊密に進行中にあり、尚進んでは、そちらの学者達が南北韓と、蘇聯、日本等が参加する「東北亜経済区」というものを設定して、技術と人力の相互交換を提議して来る等、現状を考察する時、我北方政策と歩調を合はせて、之から経済部門に限らず、文化、学術、科学、Sports等の交流が一層活潑になる事が予想される故に、かかる好機を迎えた我々の現時点は本当に忙がしく、又、文字通り西海岸時代の全盛期が到来している事を実感しながら、併せて天運の恩恵にも真実に感謝せざるを得ないであろう。

所が、茲数年の我韓国情勢は、ウォン(W)高と、米国等の開放圧力と、又、国内労使紛争という悪条件に加えて、国民達の解弛した精神状態から来る一時的現象ではあるものの、過多消費風潮まで起きて、開発と発展に多くの支障を招来している現状の上に、又、最近の中国々内事態が内紛という形態にまで進展せんとする混迷状態が起きて、これ等色々の事象が、我国に甚だ不利に作用している事も間違いのないけれども、これ等の事態は何処までも恒久的なものではない以上、近い内に何時かは安定を取り戻すものと予見される故に、西海岸時代の到来が暫く遅れるだけであって、我等の計画と展望に大きく蹉跌をもたらすものではない事を又、銘心すべきであろう。